

## ハンマー10話

## ハンマー10話の再連載を終えて

株式会社 復建技術コンサルタント 吉川謙造

15年も前に当協会の「技術ニュース」に連載していた「ハンマー10話」を再連載していただき感謝です。読み返してみると、色々なことを懐かしく思い出すことが出来ました。

しかし、マムシや蝶の事を書いているうちは良いが、他人様の事を書くのは本当に難しい事で、当時の文章の中には本名を隠していても、知った人が読めば「ああ、あのんだ」とすぐに判るものもあり、やはり他人の悪口は書くべきではなかった、あと20年もして、関係者がみんなこの世から姿を消してから、恐る恐る出すべきではなかったのか、と冷汗しきりである。TVや週刊誌で他人の悪口を面白おかしく、あるいは辛辣に話すことを商売にしている人が居て、世間ではこれを歓迎する風潮があるように思えるが、つくづく良くないことだと思う。

最後に地質学の奥深さと、真摯に学問の道に生きる人の思い出話をさせていただき、締めくくりとしたい。

私の20代は幸いにも、鉱山会社という学閥的には中立な職場に勤務していたため、日本中の大学の先生方、それも専門の鉱床学、応用地質学だけでなく、純粋地質学の大権威と

いわれる方々にも臆面もなく接して、数々のご指導を頂く機会に恵まれた。その中のお一人、秋田大学教授のK博士は、わが国の古生層中に分布する、古い時代の花コウ岩礫を含む薄衣（うすぎぬ）礫岩の研究で、日本の造山運動の歴史を見事に解き明かし、その業績で学会賞を受賞しておられた。先生の研究は東北の北上山地からはじまって中部・四国・九州へと発展し、日本列島をほぼ縦断する壮大なスケールで展開されたものであった。

ところが九州でこの学説を証拠として記載された地層（見立礫岩）の地質時代について地元の研究者から異論が発表されたのである。つまりこの地層は明らかに古生層ではなくもっと新しい時代（古第三紀）のものであり、従ってこの学説のカバーする範囲から九州は除くべきである…と。

私が九州の奥地、宮崎と大分の県境付近の見立鉱山に勤務したのが、ちょうどこの論戦が行なわれている真っ最中であった。当時鉱山へは東京から寝台特急、ローカル線、それに一日3往復しかないバスを乗継いで丸一日がかり、秋田からであればさらに一日を要した。しかも論争となった地層の分布地は、毎

日2 km以上の山道を通勤していた我々の足でも、鉾山事務所からたっぷりと1日はかかるけわしい山奥にあり、道らしい道もなくヤブこぎ、沢こぎでようやくたどりつける所であった。

K先生は、私とその鉾山に勤務していた2年余りの間に都合3度もこの地を訪られた。地質屋として歩くことには慣れていたはずであるが、もう60才近い高齢であることから、足取りもおぼつかなく、丸太や苔の石に足を滑らせて何度も転倒される姿に、同行した我々もハラハラのし通しで、この調査はすこぶるつきの難行であった。

しかしこうしてようやく辿りついた露頭で先生は、流れる汗を拭おうともせず、スケッチ、写真撮影そしてサンプル採取と、まるで帰路の事を考えておられないような精力的な動きをされていた。その上、現場の露頭の解釈については私のような経験の浅い者にまで客観的な意見を求められるなど、実に真剣な態度で真実の究明に取り組んでおられたのである。そして帰りの道も心配していた通りの事の繰返しになった。

正直いって、この地層の時代がどっちにころんでも、鉾山の探査方針には大きな影響はなかったので、浅学非才な私には、どうしてこんな事にそれこそ命をかけるような大変な思いをしなければならないのか、という気持ちがあったことは確かである。

そんな気持ちが顔に出たのだろうか、2回

目だったか、3回目だったかの来山のおりに先生は、「私がどうしてこんなに苦勞して何回もこの山奥へ通うのか、不思議に思われるかもしれません。しかし学者というものは、自分が発表した学説には最後の最後まで責任を持たなければならないのです。これまで再調査した結果では、残念ながら私の結論の一部を訂正しなければならないようですが、僅かでも他の解釈が出来る所が残されている限り、私はそこへ通い続けます。そこがどんなに遠い所でも、どんなに大変な所へでも、体力が続くかぎり出かけて行くつもりです。これが学者の良心なのです。」とお話して下さいました。

ここで一言おことわりしておくが、K先生の学説はこの九州の1ヶ所の地層が否定されたとしても、全体としての結論はいささかも揺らぐものでなく、地質学の業績としては不動の地位を占める立派なものであった。しかし先生はたった1つの事がらに対しても、いささかもおろそかにせず、学者としての良心を貫き通すという姿を見せて下さったのである。

囲碁を打つ人達の中に「打ちすぎ」という言葉がある。碁の強い人で打つ手が早見えする人が調子に乗って、十分な読みの裏付けを伴わないうちに打ってしまった石である。相手が後退して受けてくれれば普通の手、あるいは良い手になる場合もあるが、相手にじっくりと読まれて反撃されると、思わぬ欠陥を

